北アルプス　剱岳東大谷中尾根（3 月）

日時:1960 年 3 月 28 日～3 月 29 日

メンバー:高田直樹（L）、菊山雄三、林修、中村喜行

概要:3 月の東大谷中尾根の記録。雪の状態が非常に悪く、雪崩を誘発しながらの行動。 この記録以前の積雪期の中尾根の記録は、1950 年 4 月の日本医科大山岳部によるもののみであり、立山川をさかのぼり、東大谷出会いに BC を置いての記録である。

前年、別山尾根より下降してG1 尾根の厳冬期初登攀を成功させたのに続いて、今度は早月尾根より東大谷左俣を下降しての中尾根登攀をもくろんだ。大学の卒業式を済ませてすぐ、列車に飛び乗った高田は、後輩が待つ早月尾根2500mのテントに急行して合流、食い延ばしをしながら晴天を待ち、3人の現役新人とともにこの計画を成功させた。

もっとも気がかりだったのは、下降の途中雪崩に遭遇することであった。そこで、早月尾根登行の途中、積雪の断面を調査し、雪崩の危険を予知しようと試みた。

記録

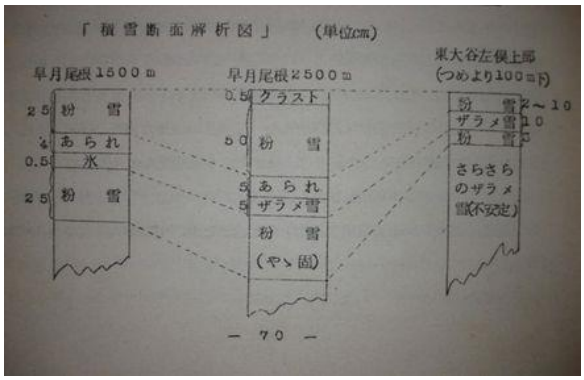
3 月 28 日

早月尾根 2500mBC（6:00）－左俣のつめ（7:00）―左俣―中尾根取り付き点（8:00）―中尾根リッジ（13:45）―チョンラピークビバーク地点（17:30）

数日間続いた吹雪も収まり、27 日夜半、早月尾根 2500m の空には星が輝いた。全員 1 時に起き、アタックの用意をした。

6 時、夜が白むのと一緒に出発。早月尾根はひどいラッセルで深いところは腰近くまである。左俣下降に不安を感じたがとにかく行ってみることにする。

左俣を少し下って、偵察の結果 5 日前の偵察でつけた標識により新雪はこの付近で 3 メートル近くあることが知られた。しかしこの層には不連続面はなく比較的よくしまっていた。



上掲の図は、早月尾根1500m地点、2500m 地点。およびアタック前日に偵察に赴いた、東大谷左俣のつめより100m下った地点の積雪断面の解析図である。

これによって、最上層の新雪は安定しているとの予測がたった。不安はあったが雪崩には一応安全との判断で下降することにした。

高田―林、菊山―中村の 2 パーティにアンザイレンして 30m 間隔でコンテで左俣を下った。下るに従いラッセルは腰くらいとなり全く薄氷を踏む思いで一歩一歩を踏み出した。

左俣をまっすぐにくだり駒草ルンゼ出合より約 100m 下方で左俣を横切って 2500mよりの偵察で見つけておいた中尾根側壁取り付きに達した。

我々は今回の計画で駒草ルンゼの登攀あるいは東大谷の偵察を目的とした中尾根の登攀をもくろんでいた。しかし沢筋ばかりをたどる前者のルートを取れるほどの良い条件とは言えなかった。そこで目標を中尾根と決めた。

ここまで来れば一応雪崩の危険はうすらぎ安らごうとするが、眼前にそびえる二本槍、三本槍の景観はこの世のものとも思えぬほどのものすごさで、胸苦しくなるような圧迫を感じるばかりであった。

側壁のルートといっても 2500m の幕営地より大体ブッシュを伝っていけると見当をつけただけで甚だ心もとない。

雪は比較的堅くすね位までしかもぐらないので、

2 パーティは夫々コンテで、約10mばかり最初の雪壁を斜めに登り、ブッシュ帯に入ろうとした時、ブーンという鈍い音響と共に雪崩が発生した。前を流れる林を止めるため、高田はシャフトにザイルをまいて制動をかけたがすぐザイルはいっぱいとなりショックで空中高く飛ばされてしまった。

全員 10m ばかり流されて側壁の基部で止まった。中村が「東大谷はやっぱりショッパイですなぁ」としきりに感心しているが、ともかくショックである。雪崩は上部約 50cm の新雪が下部旧雪と不連続面を作りこれを切ったために発生したものとわかった。

以後は慎重にスタカットで直登したが、ルートの都合上やむなくトラバースすると必ず雪崩を踏み出した。トレースよりきれいに切れ段ができ、後にはザラメ状の旧雪が現れていた。50～70 度の雪壁をザーと音を立てて落ちダケカンバ等のブッシュでそれが雪煙を上げる様子はあまり気持ちのいいものではなかった。13 ピッチ目で大雪壁の下に出た。

（中尾根左俣側下部の大雪壁）

ここで我々が登ってきた尾根状のダケカンバ帯はこの大雪壁に消えていた。大雪壁は高さ 70m、幅は 100m 近くあり、左右いずれかのブッシュ帯に入るには大きくトラバースしなければならない。

太陽は頭上に輝き左尾根や大日岳の斜面から雪崩の轟音がひっきりなしに聞こえた。前の雪壁は今にも雪崩れそうに思われた。直登以外に手は無かった。林がトップで一歩一歩這うようにラッセルしながら登った。高田はもし彼が流されたら彼の流れた反対側に飛び込み、ザイルをブッシュに引っ掛けるつもりで息をこらしていた。40m いっぱいにザイルが伸びたとき林はシャフトの先よりにおうハイマツのにおいを敏感にかぎつけ、ハイマツの根を掘り出して歓声を上げた。

結局この 40～70 度の側壁の登攀は 15 ピッチで終わった。ようやく中尾根のリッジに出て以降新雪で膝くらいまでもぐる鋭いスノーリッジを一歩一歩スタカットで進んだ。

このころより天候が悪化し始めチョンラピークの基部に達したころより本格的な吹雪となった。チョンラピークの基部をブレーカブルクラストの雪壁をだましだましトラバースして中俣側に出た。

時間は 5 時半で以下のルートも判然としないのでここにピッケルで雪洞をほり、四名はこれにもぐった。ちょうどこの日は東大谷に逝った仲間の命日でもあり気のめいるビバークだった。

3 月 29 日

ビバーク地点（9:00）―シシ頭（14:00）―BC（15:30）

この日は視界数 10m のガスで一時籠城を覚悟したが、9 時前より風が収まったので進めるところまで進むつもりで出発を決意した。

全員雪洞を出たとき全く突然にガスが切れ始め、みるみる天気が良くなり士気は上がった。チョンラピークより 2 ピッチで中尾根のスノーリッジは高さ約 100m の階段状の岩壁に消えている。この岩壁を駒草ルンゼよりのガリーをルートにして、3 ピッチのぼり、駒草ルンゼ最上部の岩壁を越すとシシ頭へつづくゆるい雪壁である。テント帰着まで 33 時間半に及ぶアルバイトであった。この登攀におけるフレッシュ林、中村の活躍はたたえられるべきである。（高田直樹記）

（右写真）中尾根上部の岸壁